

第26回 吉田秀和賞 受賞作品

立花 隆 『武満徹・音楽創造への旅』(文藝春秋 2016年2月刊)

[審査員選評]

今年には武満徹没後20年です。

これを記念して国内の音楽フェスティバルや定期演奏会のプログラムではいずこも武満徹がフィーチャされており、立花隆さんの『武満徹・音楽創造への旅』の出版はまさに時宜を得ています。

私は1960年前後の10年間、この本で扱われている人々の事件となったパフォーマンスを含め、ほとんどの初演を観衆のひとりとして片隅で聴いてきました。その間の事情は実に細かく聞き取りがなされ、巧みに描写されています。そのことだけでも「吉田秀和賞」に値します。

が、何故出版が伸びたのか。作品の芸術性の評価のさわりに吉田秀和さんのコトバが幾度か引用されています。アヴァンギャルドから日本楽器の<音>と<声>を大胆に世界の音楽界のなかに持ち込んだタケミツを私は賞賛していますが、まさか、これを吉田秀和さん本人に聞かせたくなかったのではないでしょうね。

磯崎 新

人間は自分の目線でしか相手を見られない。巨匠を真に理解しようとするには巨匠級の目線が、天才を本当に分かろうとするには天才級の目線が必要だ。しかもその目線を送る者は目線を送られる者と異分野の人である方が往々にしてうまく行く。同業だとライヴァル心の入ることもあれば、会話が仲間内の符牒で完結してしまうこともある。

その意味で、作曲の天才、武満徹と、音楽にも造詣の深い巨匠ジャーナリスト、立花隆の組み合わせは、まさに理想的。立花が武満にインタビューを重ねる。立花が打てば武満が響く。そこに紡がれる武満の言葉の周辺を立花が丹念にときほぐす。すこぶる分厚い本になった。

といっても、本書は武満徹の芸術と人生をトータルに描ききったものではない。道半ばで作曲家が逝ってしまったからである。まるで巨大な未完のトルソのような。読者は書かれなかった隙間や語られなかったその先を自ら埋めたくなるだろう。たとえば武満の遺したたくさんの音楽を聴きながら。

オープンなのである。自由なのである。膨大なのだが重圧感はない。本書のよさだ。読者は、立花の用意した情報の海を様々なルートで漕ぎ渡りながら、いろいろな行き先を見つけられるだろう。

武満徹は吉田秀和賞の審査員でもあった。その没後20年に水戸育ちの立花隆による武満の本がまとまる。水戸の縁も巡っているのだろう。何だかとても嬉しい。

片山 杜秀

[著者略歴]

立花 隆 (たちばな・たかし)

1940年長崎市生まれ。茨城大学付属小・中学校卒業。56年茨城県立水戸第一高校入学、2年生時に、東京都立上野高校へ転校。59年同校卒業。64年東京大学仏文科卒業。同年、文藝春秋入社。66年退社し、67年東大哲学科に学士入学。在学中から評論活動に入る。74年の「田中角栄研究—その金脈と人脈」(「文藝春秋」11月号)で金脈追求の先鞭をつけ、社会に大きな衝撃を与えた。その徹底した取材と卓抜した分析力による文筆活動で菊池寛賞、司馬遼太郎賞を受賞。著書に『宇宙からの帰還』『脳死』『精神と物質』『サル学の現在』『21世紀 知の挑戦』『天皇と東大』『がん 生と死の謎に挑む』『読書脳 ぼくの深読み300冊の記録』『四次元時計は狂わない 21世紀 文明の逆説』『死はこわくない』『「戦争」を語る』ほか多数。